Spring Storm

五円玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｐｒｉｎｇ　Ｓｔｏｒｍ

【Ｎコード】
Ｎ５１８０Ｎ

【作者名】
五円玉

【あらすじ】
春は全ての始まりの季節――――１人の青年の周りで起きる、もうひとつの物語。「三人の姫と一人の手下の物語」番外編！！　作者としては、三姫本編を読んでからこちらを読んだ方が楽しめると思います！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　美しき羽の思い（前書き）

ども～！！

今話は三姫本編第２話の番外編です。

今回の主人公は濱垣美羽！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　美しき羽の思い

私には、昔からの幼なじみがいる。

たまたま家が近くて、幼稚園が一緒だったから知り合った。

アイツはバカで、アホで、マヌケで、オタクで、デリカシーなくて、センスもなくて、おまけに男のくせになよなよしてる。

正直、もっとしっかりして欲しいっていうのが、私の感想。

こう、男としてしゃきっとして欲しい。

けど、

そんなアイツにも、いい所はあったり。

優しくて、たま～にだけど頼りになる。

幼稚園の頃からずっと一緒だったアイツ。

幼稚園の頃は、一緒にお昼のお弁当を食べた。

一緒にお昼寝もした。

小学生の頃は、一緒に運動会のリレーで走った。

一緒に合唱祭で歌ったりもした。

中学生の頃は、一緒に修学旅行で京都を回った。　文化祭で一緒に劇もやった。
一緒に、卒業式で涙を流した。
楽しさも悲しさも、一緒に体験してきた。
もちろん、友達として、幼なじみとして・・・。

けど、いつからだろ？
私が、アイツを友達以上に思うようになったのは。
幼なじみ以上に、アイツの事を思ってしまうようになったのは。
私は・・・

「何してんの？」

「えッ！？」

誰かに話し掛けられた。
机に伏せていた私は、ガバッと起きる。

「どうしたの？　頭でも痛いの？」

「あ、いや・・・だ、大丈夫！」

「そ、そう？」

話し掛けてきた相手――――同じクラスメートの沖島さんは、まだ心配そうな顔。

「ほんと大丈夫だから、ほんとだから！！」

私は笑顔を作り、大丈夫をアピール。

私の名前は美羽。
濱垣　美羽、１６歳。
〇〇県にある公立高校、葉城高等学校の2年3組在籍。
そして、私はこの学校の生徒会長でもある。
「さてと、授業も終わったし、今日も生徒会の仕事、春に手伝ってもらおうかな！！」
と、いう事で生徒会緊急事務員の木山春吉君を探そうと思ったんだけど・・・・・。
「・・・あれ？」
教室に・・・春がいない？
今は帰りのＳＨＬが終わってから、まだ5分もたっていない。
いつもだったら、教室の後ろで波動拳大会とかやってるのに・・・。
「・・・美羽？」
「えっ！？」
突然後ろから呼ばれた。

「・・・どうしたの？」

「あ・・・なんだ、小夜かぁ～」

そこにいたのは、私の友達の荏咲小夜。
手にはほうき・・・ああ、掃除当番なのね。

「・・・美羽、大丈夫？　ぼーっとしてたけど・・・」

「あー、いや全然。ただちょっと、春を探してて・・・」

私はもう一度教室を見渡す。

・・・やっぱり、春はいない。

「・・・春吉なら」

「ん？」

小夜は外を指さした。

「・・・楓と一緒に帰ってたよ？」

「楓と？」

沢那楓、彼女も私の大切な友達。

「・・・（コクリ）」

「そ、そうなんだ・・・」

なんだ・・・帰っちゃったのか・・・。

「・・・何か用事でもあったの？」

「えっ！？　・・・あ、いや、別にたいした用事じゃないよ！！」

「・・・そう？　じゃあ私、掃除当番だから」

「あ、うん」

そう言うと、小夜は廊下へ。

「・・・はぁ」

仕方ない、生徒会の仕事は一人でやるしかないか・・・。

ウチの生徒会はかなり忙しい。

部活や愛好会の報告書のチェック、生徒会予算の計算、生徒の生活面のチェック・・・等など。

「はぁ～・・・」

今日も多分、ずーっとはんこ押しかな。
あとは、生徒会通信作って、学校のホームページを更新して・・・・
。

「・・・・・」

私以外、誰もいない生徒会室。

副会長も、書記も、会計も、庶務も全部私がやっている。

・・・そもそも、みんな用事で来てくれないだけなんだけど。

「・・・やっぱ一人だとつまらないなぁ～」

永遠のはんこ押し。

段々と、指先が痛くなってくる。

「・・・・・」

・・・私は生徒会長。

そして、私は自他共に認める、極度の上がり症。
人見知りが激しくて、恥ずかしがりやで、人前が苦手で・・・。
本来なら、私なんかが生徒会なんかに立候補はしない。
けど、今こうして会長の位置にいる。

「・・・ふぅ」

・・・春は知ってるのかな？

私が生徒会に入った理由に、春がものすごく関係している事を。

あの日あの時、春が私に言った一言で、全てが変わった事を・・・。

「何でなんだろう・・・何で・・・」

私は・・・

春の事ばかり考えてんだろう・・・。

「考えてても仕方ないか！！」

生徒会の仕事が終わり、現在下校中。

「明日から、またいつも通りで」

今日は夕日が眩しい。

明日は晴れるかな！？

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　美しき羽の思い（後書き）

次回は本編第４話の番外編！！

お楽しみに！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　とある日の放課後（前書き）

今回は本編第４話番外編！！

主人公は泡岸麗！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　とある日の放課後

「明日、生物の小テストだって。麗、どうする？」

ここは葉城高校、一年五組の教室。

「どうするって・・・別に・・・」

現在、６時間目の授業が終わり、帰りのＳＨＬを受けている所。

「ねぇ麗、今日の放課後、空いてる？」

「空いてるは空いてるけど・・・」

「じゃあさ、放課後図書室で勉強しない？　小テストで赤点取ると、再テストあるらしいし」

「・・・再テストかぁ～・・・」

・・・私の名前は泡岸麗。

「どうせ暇なんでしょ？　はい、放課後図書室決定！！」

さっきからしつこく勉強を進めてくるコイツは、今川鈴。

私の後ろの席で、入学してからやたらとちょっかいを出される。

「別に私、そこまで生物は苦手じゃ・・・」

「ほら、もうすぐＨＬ終わるから、早く支度しな！！」

・・・人の話、聞いてない・・・。

その日の放課後
図書室

「麗、これ分かる？」

「・・・それは染色体、これはミトコンドリア、そっちのは葉緑体」

「凄い・・・」

今、私は鈴と生物の勉強中。

「細胞壁と細胞膜って・・・何が違うの？」

「・・・教科書３１ページ」

「えっ！？」

鈴は呆れるほど勉強が出来ない。

「あー、本当だ！！　載ってる！！」

「・・・そこ、感動するとこ？」

はぁ・・・

「じゃあさ、細胞の核の中身は？」

「教科書３５ページ、もしくは資料集４６ページ」

で、少し勉強した後

「ゴメン、私ちょっとトイレ行ってくる！」

「あ、うん」

鈴は立ち上がり、一旦トイレへ。

「・・・全く」

まさか、鈴がここまで生物が苦手とは・・・。
細胞の構成すら分からないなんて。

「はぁ・・・」

・・・疲れた

その時・・・

「はい次、因数分解の問題」

「も、もう無理！！」

・・・隣の席から、何やら声が。

「春、明日のテスト赤点取りたいの？」

「い、いいえ！！」

「だったらやる！！」

・・・隣の席で、何やら男子と女子が何かやってる。

「だいたい、春はいつも適当過ぎるのよ。もっとやる気を出して・・・」

「わ、分かった、分かったから竹刀は止めて！」

・・・ネクタイとリボンの色が緑。

つまり二年生・・・

「いやだったらやる気を出しなさい！！」

パシーンッ！！

「うおっ！！　ちょ、おま、止め！！」

パシーンッ！！

・・・どっかのバカップル？

とりあえずは見ない事にしよう。

「おまたせー・・・って麗？」

「ん・・・あ、ああ」

鈴が帰ってきた。

「どうかした？」

「ん、あ、別に」

「そう？」

そう言うと鈴は教科書を閉じた・・・え？

「よし麗、今から遊びに行こう！！」

「えっ！？」

勉強は！？

「だって勉強に飽きたんだもん。麗も早く片付けて遊びに行こ！！」

「飽きたって・・・」

再テストの覚悟を決めたのかな？

「どうする？　カラオケでも行く？」

「カラオケって鈴、明日テストだよ？　もう諦めたの？」

「諦めた！！」

きっぱり言った・・・

「そんなテスト勉強より、早くカラオケ行こ！」

「・・・明日、泣いても知らないから」

で、カラオケ店

「申し訳ございませんが、あと３０分ほどお待ち頂くようになりますが、よろしいですか？」

「あ、はい」

３０分待ちか・・・まぁそれくらいなら。

「ねぇ麗、私ちょっとトイレ行ってくる！！」

「あ、うん」

また・・・。

「じゃ！」

で、鈴はトイレへ。

「・・・・・・」

・・・暇だなぁ。

とりあえず今のウチに携帯小説でも・・・

「お前、図書室で勉強じゃなかったのか？」

・・・え？

「だってよ、春吉がふざけ過ぎてて・・・」

・・・ん？

「権三朗、春吉は基本ふざけ人間だ。そのくらいで諦めてたら、出番なんて一生ないぞ」

「うるせぇな、少なくとも俺はテメェよりかは先に物語には出てんだぞ、そのへん弁えろ赤佐！！」

・・・地味メン男子二人が口喧嘩してる。

「なっ・・・お前、痛いところを・・・」

「へっ、調子乗るな赤佐！！」

「・・・でも多分、今後お前より俺の方が出番多くなるぞ？」

「・・・・・・」

「フッ・・・権三朗、部屋空いたらしいから、早くカラオケしようぜ」

「・・・・・・」

・・・二人は近くの部屋に入っていった。

「おまたせー・・・って麗、どうかした？」

「えっ！？」

目の前には、いつの間にか鈴の姿が。

「あ、いや、別に」

今日は何だか変な人を良く見かけるなぁ・・・。

「麗、部屋空いたらしいから、早く行こ！！」

「あ、うん・・・」

まぁ、いいか。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　とある日の放課後（後書き）

次回は本編第５～６話番外編（予定）！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　葉城高等学校柔道部（前書き）

どもなのです。

今回は本編とあまり関係は無いんですが、強いて言うなら本編第５話辺りの話です。

主役は本編でほとんど出番のない本谷先輩！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　葉城高等学校柔道部

とある日の放課後
葉城高校柔道場

「じゃあ・・・二年生だけど、沢那さんが大将って事でいい？」

『はい！！』

私の名前は本谷雛乃。

葉城高校三年、柔道部の副部長。

「じゃあ沢那さん、大将頑張ってね！！」

「ほ、本当にあたしでいいんですか・・・？」

こう言うのは、我が葉城柔道部期待のエース、沢那楓。
まだ二年ながらも、この葉城柔道部で最も強い部員。

「今更何言ってんの！！　沢那さんはあの伝説の鬼こと、佐久川部長を負かしたんだよ？　もっと自信を持ちなさい」

「え～・・・でも、やっぱり大将は佐久川先輩か本谷先輩が・・・」

今、葉城柔道部員は柔道場にてミーティング中。

ゴールデンウイークにある、大会のチーム決めの真っ只中。

「沢那さん、あなたは強い、大丈夫。しっかり頑張りなさい、次期部長さん！！」

「先輩・・・」

沢那さんは少し困り顔をしていた。

「本谷よ、沢那の様子はどうだ？」

「まぁ、渋々ながらも、大将にはなるって」

「そうか」

今、学校からの下校中。

私の隣には昔からの友達で、柔道部の部長でもある佐久川さん。

「・・・やはり、沢那は凄いと思う。なんたって、この私を負かした初めての後輩だからな」

佐久川さんは何故か誇らしげ。

「・・・三年生はあと二回大会に出場したら引退だ。やはり、安心して引退したいものだな」

「・・・きっと、二年生がしっかりやってくれるわ」

・・・引退、か。

「やっぱり、犬ノ助はカッコイイ・・・」

その日の深夜。
私はとある深夜アニメを鑑賞中。

周りにはナイショだけど、私は二次元派のオタクなのです。

「・・・凄い、まさかここで猿子が・・・」

かなりアニメに熱中していた私。

今の時間は夜中1時過ぎ。

「猫と猿・・・どっちが犬の・・・」

その時・・・

ブ～ブ～ブ～!!

「ん？」

携帯のバイブ音？
これは・・・メール？

「こんな時間に誰からだろう？」

私は何気なく携帯を開き、メールを確認。

送り主　佐久川美里

「佐久川さん？」

何だろう・・・？

翌日、柔道場

今日は休みの日だけど、大会が違い柔道部は休日練習あり。

で、

「佐久川さん、昨日のメール・・・」

「ああ、見てくれたか！！」

昨日・・・もとい今日来たメールには、今日の部活の事が書かれていた。

「あれ、本当にやるの？」

「・・・ああ、やるさ」

佐久川さんはもう柔道着に着替え、正座。

「でも、大会前に怪我でもしたら・・・」

「・・・大丈夫だ。これは私のためでもあり、アイツのためでもある」

「佐久川さん・・・」

その時、

「おはようございます！！」

「あっ、おはよう」

柔道場に沢那さんがやって来た。

「お早う沢那。で、早速で悪いが、着替えが済み次第、すぐに私の元へ来てくれ」

「え？　・・・あ、はい」

突然の呼び出しに、沢那さんは少し戸惑い気味。

「只今より、私と沢那の試合を執り行う！！」

「えっ！？」

柔道着に着替え、言われた通りに佐久川さんの元へやってきた沢那さん。

だけど・・・

「沢那、アップをしておけ。準備が整い次第、すぐに始めるぞ」

佐久川さん、勝手に試合を申し出た。

「ちょ、佐久川先輩、なんで試合を・・・？」

もちろん沢那さんは戸惑いを隠せない。

「良いから、とにかく試合だ」

私は知っている。

これは、佐久川さんと沢那さんのための試合なのだと。

二人の気持ちを、整理するための・・・。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　葉城高等学校柔道部（後書き）

次回後編で、まさかの２話またぎ！！
次からは１話完結を目指して頑張ります。

次回の投稿は９月１４日辺りになっちゃうと思いますが、どうか気長に待っていてくれると嬉しいです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３．５　部長と大将と自信（前書き）

前話の続きです！

Ｅｐｉｓｏｄｅ３．５　部長と大将と自信

「セイッ！！！」

沢那さんと佐久川さんの試合。

唐突に始まったこの試合、やはり沢那さんの方が若干強い。

「フッ・・・さすが沢那だ。この気迫は素晴らしい！」

佐久川さんは一気に踏み込み、攻撃を仕掛けた。

けれど・・・

「エイッ！！」

沢那さんはその動きを見切り、咄嗟にかわした。

「しまった・・・」

佐久川さんはバランスを崩す。

そして・・・

「沢那、お前に足りないのは自信だ」

「自信・・・」

二人は汗でびっしょり。
お互い息も荒い。

「お前には自信を持ってほしい。そして、もうすぐで引退する私達を安心させてくれ」

「・・・先輩」

今後の柔道部を背負って立つ事になる沢那さん。

そのためには、自分の力を信じる自信が大事。

「お前は強い！！」

「っ・・・！！」

「もうお前は私を越えたんだ。次の大会は、お前が大将だ！！」

「先輩・・・わかりました！！」

沢那さんの何かが吹っ切れた！！

「あたし、大将やります！！」

その瞳は輝いていた。

「任せたぞ、沢那！！」

「と、言う事で本谷、私は副将になる！！」

「そ、そう・・・」

その日の帰り道。

今日も佐久川さんと一緒に下校中。

「本谷は先鋒でいいよな？」

「あ、うん。別に構わないけど」

でも何で今？

「・・・もう安心だな」

「佐久川さん？」

「・・・次の大会、絶対に勝とう！！」

「・・・うん」

大会・・・か。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　青の王者は光に笑う（前書き）

今回はあのブルーパンチリーダーが主役。

ちょっとした過去話です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　青の王者は光に笑う

何故、この社会は弱者を見捨てるのだ？

何にしても、弱者はいらない世界。

強者ばかりが光を浴び、弱者は闇を踏む。

光とは、平等ではないのか？

闇は本当に弱者だけのものなのか？

僕は弱い。

誰からも見られる事はない。

皆はいつも、強い人をみる。

弱者はシカトされるだけ。

光は、強者にしか向かない。

フッフッフ・・・

「弱き者の足掻き、それほど醜い物はない」

とある高校。
とある教室。

僕は、いわゆる“不良”と言う奴らに囲まれていた。

「なんだテメェ！！　弱者はテメェの方だろうがコラァ！！」

不良の数は１０人程度か・・・。

「・・・フッフッフ、確かに・・・僕は弱い」

「何言ってんだテメェ！？　キモいんだよ！！」

不良達は既に戦闘スタンバイ。

「しかし・・・君らの方が弱い」

僕を見ろ・・・

光よ、僕を見ろ・・・

「弱い人の下にさらに弱い人がいた場合、最初の弱い人は強者となる」

「テメェ、ぶち殺す！！」

『おおおぉぉぉ！！』

不良達は一斉に飛び掛かって来た。

「・・・弱者はいくら集まろうと弱者には変わりない」

「テメェ！！　ブルーパンチを嘗めるなよ！！」

ブルーパンチ――――我が校の不良の集まり。

「・・・野蛮な弱者は嫌いだ」

仕方ない・・・

刀を抜くか。

「君が・・・ブルーパンチのリーダーか？」

我が校の体育館

そこには、大量の不良の集まり。
そして、ステージ上には一人の男。

「誰だお前？」

彼はステージ上から飛び降りた。

「フッフッフ・・・僕に光を見させてくれ」

僕は刀を抜く。
我が家に伝わる、ひとふりの太刀。

「お前・・・一年生か。その顔は確か・・・」

彼は何かを思い出したみたい。

「フッフッフ・・・僕の光のために、このブルーパンチは貰うよ」

僕はその場から一気に跳躍。

「おいテメェら、その男を捕まえろ！！」

『おおおぉぉぉ！！』

フッフッフ・・・弱者はいくら集まっても

「・・・弱者だ」

次の瞬間、体育館は紅く染まった。

「僕は誰かに見てもらいたい」

ただ、それだけ。

光が欲しい。

「アニキ、もうすぐで葉城の連中が来ますぜ！」

「そうか・・・」

ここはとある廃工場。

「守屋、お前は南の入口へ行け」

「あいよ！！」

彼は僕の指示どうり、工場の南入口へ向かった。

「牛渓、櫛山。君達も早く各入口へ行きなさい」

「・・・了解」

「チッ、かったりぃ～なぁ～」

・・・これから、ここにとある弱者共が来る。

弱者は嫌いだ。

「僕にはもう・・・力しかない・・・」

フッフッフ・・・

「光を見よう」

そして・・・光を浴びた時―――僕は彼を殺す。

「いつかは君の上に立つ強者となろう」

僕が殺しそこねた、唯一の男。

元ブルーパンチリーダー

「吉崎龍牙・・・」

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　荏咲家ＶＳ黒い悪魔（前書き）

今回は荏咲家が主役！！

ちなみに作者も生理的に黒い悪魔（Ｇ）は無理です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　荏咲家ＶＳ黒い悪魔

「で、出たぁ！！」

俺は叫んだ。

こんにちは！！

俺の名前は荏咲　月也。

中学３年生。

俺の家は市営団地。

姉一人と妹弟多数の七人姉弟。

母ちゃんは今、訳あって家にはいない。

父ちゃんはもう亡くなってるし。

だから今は、姉弟七人で団地住まい中。

「さ、小夜姉ぇ！　出たあ！！」

今は午後８時。
俺は風呂に入ろうと着替えを準備し、脱衣所に向かった。

しかし、そこに奴はいたんだ。

脱衣所の扉を開けた
その時・・・

カサカサカサッ！！

「あ・・・」

そこにいたのは、黒い悪魔（Ｇ）！！

「出たぁ！！」

この市営団地にはよくGが出没する。
そして俺は、虫が苦手だ。

カサカサカサッ！！
「う、うわ～！！」
Gが動く。
うわっ、こっちくるな！！
「た、助けて誰かぁ！！」
カサカサカサッ！！
ぎゃあぁぁっ！！
Gの触覚が動いた！！

「む、無理無理！！　絶対無理！！」

生理的に無理！！

Ｇ大嫌い！！

カサカサカサッ！！

うわっ、こっちへ来た！！

「うわっ、やばっ、ちょっ！！」

あ、ヤバイ！！

その時・・・

「・・・月也？」

廊下から聞こえた、天使の声。

「さ、小夜姉ぇ！　Ｇが出た！！」

俺はＳＯＳを出す。

「・・・Ｇ？」

「小夜姉ぇ、とりあえず虫退治スプレー持ってきて！！」

「・・・うん、待ってて」

バタバタとどこかの部屋へ行く足音。

と、とりあえず助かったのか・・・・あれ？

「あれ？　Ｇがいない・・・・」

おかしいな？

さっきまでそこにいたのに・・・・

まさか・・・・

「逃げ出した！？」

え、何！？

この近くにＧが！？

「うわっ、嘘だろ！」

俺は辺りを見渡す。

・・・・やっぱりいないよ。

「もしかして、洗濯機の下か？」

俺は恐る恐る洗濯機の下を覗く。

カサカサカサッ！？

「ぎゃあぁぁ！！」

出たあぁ～！！

洗濯機の下にＧいたよ！！

そしてこっち来た！！

「うわっ！！」

俺は咄嗟に後ろへＤｉｖｅ！！

カサカサカサッ！！

Ｇは俺の目の前を通り、こんどは洗濯かごの下へ。

「うっ・・・かごの下に奴が・・・」

俺はもうこの洗濯かごは使わない。

カサカサカサッ！！

「ぎゃあぁぁ！？」

うっ！？

突然動き出した！！

バタバタっ！！

飛んだ！？

「む、無理だ！！　こっち来るな！！」

しかし・・・

バタバタっ！！

「ぎゃあぁぁあぁぁぁぁぁぁ！！」

Gは俺のすぐ横を通り、俺の真後ろの壁に着地。

Gと俺との距離、1メートル弱。

「や、ややヤバイヤバイ！！」

ヤバイ！！

恐怖で足が動かない。

そして振り向けない。

「・・・ヤバイ」

自然と声も小さくなる。

「・・・無理」

そして・・・

カサカサカサッ！！

「ぎゃあぁぁ！！」

背後でGが動いてる！

足音する！

「あ・・・ああ・・・ああぁぁぁ・・・」

俺は足元に目をやった。

Gは俺の後ろを通り、廊下を北上。

玄関の方へ。

「ふぅ～・・・」

良かった・・・

あっち行ってくれた。

「助かった～・・・」

その時・・・

「・・・月也！」

「あ」

小夜姉ぇ、玄関の隣の部屋から登場。

手には虫退治スプレーあり。

・・・って！！

「小夜姉ぇ！！　下、危ない！！」

「・・・えっ？」

そして

グチュッ！！

「・・・・・・」

奇妙な音がした。

小夜姉ぇはフリーズしていた。

何故だか、右足を一切動かさない。

顔は・・・徐々に青白くなって・・・・。

「さ、小夜姉ぇ？」

まさか・・・・

「・・・・・・・」

小夜姉ぇは無言。

・・・Gの姿は、もうどこにも無かった。

「・・・・・・」

「・・・だ、大丈夫？　小夜姉ぇ？」

小夜姉ぇの右足は軽く震えている。

・・・殺ってしまったのか。
Gを殺ってしまったのか。

しかも素足で。

やって・・・しまったのか。

「ア～！！」

・・・そして、リビングで寝ていた三男七星（一歳）の泣き声が、
虚しく廊下に響いた。

「・・・・・」

その日から小夜姉ぇはスリッパを履くようになったのは、言うまでもない。

「あの・・・小夜姉ぇ、ご、ゴメン・・・」

「・・・・・・」

で、しばらくは機嫌が直らなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　風邪を引いたら首にネギを巻こう（前書き）

どうもです！
最近更新が少なくてすみません！

今回は１話以来、２度目となる美羽が主人公のお話です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　風邪を引いたら首にネギを巻こう

ボコッ！！！！

「え・・・？」

皆さんお久しぶり。
濱垣美羽です。

ボゴォッボコッ！！

「な、何・・・？」

今日は5月の半ば。
ついさっきまで、学校で球技大会の練習をしていました。
あ、ちなみに私はサッカーと・・・バスケに出ます！！

ボガァッ！！！

「うわっ！？」

で、ついさっき帰って来た私は汗でびっしょりだったので、シャワーを浴びようと思い、風呂場に来たのですが・・・

ボゴアオガッ！！

「・・・・・」

さっきから、シャワーの方から奇妙な音が・・・

ボガァッ！！

「・・・・・」

どうしよう・・・怖いけど、一回お湯を出して見ようかな？

ゴアッボコッ！！

「ちょっとだけ・・・出そうか・・・な」

音はシャワーヘッドから聞こえる。

・・・よし、怖いけど一回お湯を・・・。

キュッ！！

そして私は、恐る恐るお湯を出した。

ドッバーンッ！！

「きゃっ！！？」

私がお湯を出そうと蛇口をひねった瞬間、

シャワーヘッドが吹っ飛んだ。

そして、ヘッドなしのシャワーから辺り一面に冷水が放出！！

「ひゃっ！！　つめたっ！！」

・・・しゃ、シャワーが壊れました・・・。

で、翌日。

「うぅ・・・嘘だ・・・」

昨日冷水を思い切り浴びたせいか、何だか朝から熱っぽい。

で、体温計で熱を測ったら・・・

３７、７度

「美羽、とりあえず今日は念のため学校休みなさい」

「・・・うん」

そして、お母さんに言われるがまま、今日は学校を休む事に。

「お母さん一階にいるから、何かあったら呼びなさいね？」

「うん・・・ありがとう」

ちなみにウチは一軒家。

私の部屋は二階。

・・・にしても

「頭痛い～・・・」

そして、熱による頭痛と戦いつつ、時刻はお昼の１時。

「冷え〇タぬるくなってきた・・・」

とか思っていた時、

♪～♪～♪♪～♪！！

「・・・ん？」

携帯から、メールの着信音が。

「誰から？」

私は携帯画面をチェック。

そこには、メール受信3件と表示されていた。

「3件？　もしかしてメルマガ？」

けど、3件ともメルマガではなかった。

1件目は小夜からだった。

『熱、もう大丈夫？　今日は美羽も入れて5人も休みがいたんだよ。早く風邪、治して球技大会頑張ろう！！』

「小夜・・・・・」

メールだとキャラ明る・・・じゃなくて、わざわざ心配のメールを・・・

あれ？　何だか目頭が熱く・・・

「あとで返事書かなくちゃ」

そして2件目は楓から。

『おっす、風邪か？　だったらたらふく飯食って、沢山寝ればすぐ治るぞ！！　早く元気になれよな！！』

「楓・・・・・」

子供っぽい・・・じゃなくて、楓まで私の心配を・・・。

あれ？　何故だか目から汗が・・・。

「楓にも返事書かなきゃ」

そして3件目は・・・

「うそ・・・は、春から！？」

贈り主は木山春吉。

・・・って、あれ？

「え？　画像ファイルだけ？」

メールには文が1行も書かれていなかった。

けど、代わりに画像ファイルが1つ。

「な、何だろう？」

私は恐る恐る、画像ファイルの文字をクリック。

そこには・・・

「・・・え？」

・・・な、何これ？

これ、もしかして・・・権三朗？

・・・画像は、白目剥き出しの権三朗の顔のアップ。

「・・・・・・」

とりあえず削除っと。

「あ～、権三朗のアップ見てから余計に頭痛が・・・」

現在午後４時半。

・・・そろそろ学校は下校の時間。
本当だったら今日、生徒会の仕事があったのにな・・・。
「はぁ～、明日は早く学校行って、今日の分の仕事しなくちゃ・・・」
学校だよりのプリント作り、生徒会総会の資料等のまとめ、生徒会朝会の原稿制作などなど。
「明日は頑張らなくちゃな」
その時
ピーンポーン！！
家のインターホンが鳴った。
「はーい」
そして、お母さんが対応に出ていった。
数秒後、お母さんが階段を登り、私の部屋へ。
「美羽、小夜ちゃんと春吉くんがお見舞いに来たわよ！」

「え？」

私と小夜（団地に引っ越す前）と春は、家が近所だった。
もちろん幼稚園、小学中学と一緒。

だから昔、よく三人で遊んだせいか、お母さんは二人の事を小さい時からよく知っていた。

あ、ちなみに楓の家は同じ市内でもウチから結構遠くて、小さい時はあまり遊ばなかったなぁ・・・。

って、今はそれ所ではなくて。

「美羽、二人通してもいいわよね？」

「あ、うん」

そして・・・

「よぉ、呪いの権三朗写メ見たか？」

「・・・美羽、もう風邪大丈夫？」

春と小夜がお見舞いに来てくれた！！

「うん、写メは削除したし、風邪もだいぶ良くなった！」

さっき熱を測ったら、３６度台まで下がってたし。

「なっ、お前、削除しちゃったの？　せっかくの魔よけ画像を・・・」

「あれ、魔よけだったんだ・・・」

むしろ逆な気が・・・

「・・・美羽、これ」

「ん？」

その時、小夜が私に何かを渡してきた。

「・・・今日、楓部活で来れないから、とりあえずお見舞いの品だけでもって」

「楓から？　・・・って、これ・・・」

小夜から渡された物。
それは、

「こ、コンビニのカレーパン・・・」

しかも辛口・・・

「・・・たらふく食って早く寝ろって、楓が・・・」

「・・・とりあえず、有り難く貰っておくね」

・・・明日にでも食べよう。

「あ、そうだ」

その時、何かを思い出したかのように春が呟いた。

「美羽、生徒会の仕事、おおかたやっておいたからな？」

「えっ！？」

春が・・・自主的に・・・生徒会の・・・仕事を・・・！？

「何だその目は？　・・・とにかくやってはおいたから、明日元気だったらチェックしといてくれ」

「そんな・・・」

いつも誘っても嫌々ながらって感じの春が・・・そんな事・・・！？

「だから何だその目？　俺ぁやる時はやる男だぞ？」

「ありえない・・・」

本当に・・・ありえないよ・・・。

「・・・お前、今まで俺を何だと思ってたの？」

で、翌日！！

私は見事復活！！

「あ～、体が楽！！」

で、学校へ。

「さてと、春がやってくれた仕事のチェックでもしようかな！！」

そして私は、生徒会室へ向かった。

しかし・・・

「・・・うそ」

生徒会室にあったプリントの束。
生徒会総会資料の表紙の下に、学校だよりのプリントがホッチキスで留められてあった。

「・・・春、もしかして・・・」

嫌な気はした。
けど、一応確認。

「・・・・・」

全部、間違って留めてありました。

「・・・どうしよ」

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　新訳青上強襲篇・前章（前書き）

お久しぶりです！！

今回は、以前三姫本編で執筆した青上篇に、大量加筆したものを新訳としてお送りします！！

青上本編と見比べてみると面白い……あ、いや、やっぱり見比べなくても大丈夫です。

ではどぞ！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　新訳青上強襲篇・前章

ピカァァァ！！

とある６月の空は快晴、真っ青な空は清々しい。

生温い風、太陽の光を跳ね返すアスファルト、ちょっとじめじめした空気。

「よく来たね」

落ち着いた男性の声。

ちょいと長めの青みの掛かった黒髪、低い鼻、真っ黒な二つの眼。

「・・・・・」

俺は奴の顔に視線を向けた。

相変わらず、憎たらしい顔してやがる。

本当ムカつく。

「フフフ、君の仲間三人は・・・吉崎に瀬良、そして・・・」

奴の眼は虚。

何を考えているのか、全くわからない。

「・・・フフフ」

本当よく笑うよな、コイツ・・・。
あ、いや・・・お、俺は今日、コイツをぶん殴る！！

現在、昼の１２時、青上の廃工場。
学校には風邪で休むと言ってある。
今頃、球技大会最終日の種目、バスケでもやってんだろうな。
平和だろうな。

「フフフ・・・木山君、狩られる準備は出来ましたか？」
俺の目の前には、青上ブルーパンチの皆様方。
そして牛渓、古宇宮。

「・・・俺はな、テメェみたいなカツアゲ程度でマジギレするような小さい心の持ち主には、絶対負けねぇ！！」
レッツ、自己暗示タイム！！
俺はナ〇ト、俺は忍のうずまきナ〇ト・・・。

「・・・ゼッテェシバくぜ」
夏哉は戦闘モードに！
「フン、君達は瀬良家を敵に回した事に後悔するだろう」
秋馬うぜぇ・・・

「・・・・・」

冬希は無言。
怖いのかな？

「フフフ・・・君達はとても愚かだな」

小者の古宇宮には、ぜってぇ負けねぇってばよ！！

「・・・では、早速今回のルールを説明しましょう」

「ルール？」

古宇宮君？
ルールって何？

「ルールは至って簡単。君達四人のうち、誰か一人でも人質を捕らえている倉庫内に入ることが出来たら君達の勝ちだ」

は？

「人質はこの廃工場の敷地内にある“第一倉庫”に閉じ込めてある。君達の誰かが、この倉庫内に入れたら君達の勝ちって事だ」

って、ゲーム感覚！？

「倉庫に入口は四つ。東西南北に一つずつだ」

分かりやすいな・・・

「ちなみに、こちら側からは僕を含め四人で倉庫を守る。つまり四対四」

「・・・・・」

本当かよ？

「安心しろ。他のブルーパンチ団員には手出ししないよう命令してある」

ほ、本当か？

「・・・フフフ、では今から五分後にスタートだ。ちなみに、制限時間は今日中。今日中に倉庫内に入れなければ、君達の負け。皆殺しだから」

・・・マジでか

殺すって・・・

「フフフ・・・では」

そう言うと、古宇宮と牛渓は去って行った。

その後・・・

「相手は四人で、倉庫の入口は四つ・・・多分、一つの入口に一人ってとこだろう」

現在作戦会議中！！

「じゃあ、みんなで一つの入口を攻めるか？　一番の安全策だが・・・」

秋馬が真面目策を提案。

「そうだな・・・でも、四人で纏まって行動すると、万が一トラップなんかがあった場合、簡単に全滅するぞ？」

夏哉君、まさかの否定！？

「・・・だが、安全に行動するなら四人だ」

秋馬食い下がる！！

「一人一人の方が全滅の確率は減る。それに、一つの入口に一人とは限らない。もしかしたら一つの入口に四人って事も・・・」

夏哉・・・もしかして孤立希望？

「う～ん・・・」

ぶっちゃけ、俺と冬希は戦力外。出来れば四人の方が・・・

「・・・人質を救助した際、逃げ口が多い方がいいよね・・・」

ここでボソリと、冬希が意見。

「一つの入口を攻略して人質を救助しても、万が一ブルーパンチ団員が手を出してきたら・・・俺達は袋の鼠になるな」

・・・え？

「後の事を考えると・・・二人ずつに別れて、北と南から攻略するのが吉だな」

・・・はい？

「ああ・・・そうするか」

うそぉん・・・

で、結果

北入口攻略メンバー
木山春吉
吉崎夏哉

南入口攻略メンバー
瀬良秋馬

梨本冬希

そして・・・

「・・・五分経ったな・・・」

正直怖い。

平和主義、無喧嘩無トラブルの俺が、天下の不良と戦うなんて・・・

・

けど・・・

「・・・行こう」

皆を助けたい。

小者古宇宮にギャフンと言わせるんだ!!

葉城の皆様を助ける、大作戦の実行。

青上工場第一倉庫、北入口。

「・・・来ましたね」

「・・・・・」

俺と夏哉は北入口へやって来た。
そして、北入口には・・・

「マジでか・・・」

そこにいたのは、古宇宮と牛渓。

「・・・読まれたか」

夏哉はボソッと呟く。

「・・・フフフ、木山に吉崎・・・」

不適に笑う古宇宮。
相変わらずキメェな。

「・・・おい春吉」

「ん？」

小声で話し掛けてきたバネ人間。

何だ？

「お前、ここであの二人を引き付けとけ」

は？

何だ突然！？

「ここに二人いるって事は、どこかの入口ががら空きって事だ」

ふむふむ。

「だから俺、ちょっくら東入口行ってくるから、あの二人よろしく」

「はあ！？」

え、何？

喧嘩ど素人の俺に、喧嘩最強集団のリーダーとその相棒を引き付けとけだ？

「む、無理っス！！」

無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理だ！！

普通に考えて無謀。

「うるせぇ、とにかく頼んだぞ」

ってうおぉぉい！！

あいつ、全力疾走で東入口に向かっていきやがった！！

「ちょ、ちょっと・・・」

嘘だろ・・・

「フフフ・・・」

ひ、ひぃ～！！

や、やばい・・・

古宇宮が笑った！！

「・・・牛渓、奴を追え。コイツは僕が狩っておこう」

「・・・御意」

ってうおぉぉい！！

ウシタニ君も全力疾走で東入口へ・・・

な、夏哉・・・お前の行動意味ねぇー・・・。

「フフフ・・・」

ハッ！！

この不気味な笑い声！

「さて・・・僕らも殺り合おうか」

・・・・・無理だ。

「フフフ・・・」

「・・・・・」

む、無理っス。

勝てる気がしないっス、ウッス。

「どうした？　早く掛かってこないのかい？」

今回の事件の首謀者、古宇宮と一騎打ち。

初めはね、あんなキモい野郎なんかぶっ飛ばす！！　みたいな感じできてたんですけど・・・

「フフフ・・・では、こちらから行きますよ？」

あの・・・奴・・・古宇宮の手にね、何だか・・・銀色に光る・・・鋭利な物が・・・。

「あのー古宇宮さん」

「・・・何か？」

お、乗った。

「その、貴方様が手に持っている、その銀色の物は一体・・・？」

怖いけど聞いてみる。

「これですか？」

古宇宮は、その手に持っている物を軽く上に掲げた。

「これは、名刀“嵐雲月陰”ですが何か？」

ランウンゲツエイ？

って、

「って、もろガチの刀じゃねーかッ！！」

ノーマルに突っ込んでみた。

「そうですよ、これはれっきとした真剣」

この人、もしかして銃刀法を知らない？

ってか反則！！

「我が古宇宮は戦国時代、とある名武将に仕えていた武家の家。

真剣の一本や二本、普通にあります」

あ、あんですと！？

「フフフ・・・今日は一本、家から拝借してきました」

キラリ～ンっと、シルバーに輝く刀。

こ、怖い・・・。

「フフフ・・・では、行きますよッ！！」

や、ヤバイか？　この状況。

つか、真剣とかホント反則だろッ！？

マジで殺人鬼？

その時・・・！！

バリバリバリッ！！

ドッカァァァン！！

ドッ！！

「・・・えっ！？」

倉庫の東西南からそれぞれ、かなりの轟音が聞こえた・・・

ってか、今の音何！？

「・・・ほほぅ、各自決着が着いたみたいですね」

決着？

「さて・・・では僕らもそろそろ・・・」

「うぅ・・・」

うわっ、こっちに来るよ古宇宮が！！

「ちょ、タイム！！」

「待ったはナシです！！　・・・フフフ！！」

あ、あかーん！！
殺されるよぉ！！

「くそっ・・・」

どうする・・・
この際、飛び掛かってみるか？

・・・返り討ちに合うな、絶対。

「フフフ・・・」

くそっ、マジでどうする・・・！！

その時！！

キィ～キィ～キィ～

「ん？」

な、何の音？
鉄の擦れるような、鋭い音・・・。

キィ～キィ～キィ～

「・・・フフフ、この音は」

古宇宮は何故か、倉庫の方を凝視。

すると・・・

キィ～キィ～キィ～

「あ～だりぃ～」

そ、倉庫の陰から、リアカー引いた若い兄ちゃん来た！？

「櫛山か・・・」

櫛山？

「あー、古宇宮いた」

櫛山って人は、リアカー引きながら古宇宮の前へ・・・ってか新手！？

「櫛山・・・南と西の守護はどうした？」

古宇宮が真面目に質問。

「あー、その事でお土産持って来た」

何やってんだ、あの二人？

「お土産？」

「ああ、リアカーの中見てみ」

な、何やらごそごそとやってるな・・・。

「・・・フフフ」

うぅ・・・ここからじゃ中身見れない

「フフフ・・・櫛山、あいつにも見せてあげなさい」

「あいつ・・・ああ、あんたの相手の」

すると、リアカー引いた櫛山はこっちへ接近。

「あ、あの・・・」

「・・・アンタ、名前は？」

「な、名前？」

何だこの人？

「き、木山春吉！！」

「春吉か・・・先に言っとくが、これは古宇宮の命令だからな」

ん？

何が？

俺は、恐る恐るリアカーの荷台に視線を向けた。

「・・・えっ」

な、何だコレ？

「・・・これはさっき、俺が各入口で拾ってきたものだ」

リアカーの荷台に乗せられていたのは・・・

ボロボロのバネ人間、真っ赤なハゲメガネ、無傷な冬希。

・・・無傷？

ちなみにみんな意識なし。

「安心しろ。梨本って奴とそっちの長身の奴は気絶してるだけだ。メガネの奴は火傷してっけど、命に別状はねぇ」

「えっ・・・？」

みんな・・・

「フフフ・・・櫛山、ついでにそいつも狩りなさい」

なっ・・・

「・・・また命令か」

「早く狩りなさい」

「・・・・・」

ひぃ～！！

この人、釘バット持ってる！？

「狩りなさい」

「・・・ああ」

くっ・・・来るか？

どうしよ・・・。

「じゃ、行くぜ」

「こ、こいやぁ～！」

しゃーない、俺は腹をくくったぞ！！

「・・・フッ」

は、鼻で笑われた！？

「・・・・・ッ」

次の瞬間！！

タッ！！

「何っ！？」

「覚悟しな」

ガキィ～ン！！

その瞬間、櫛山の釘バットは、何故か古宇宮の刀とぶつかり合っていた。

「えっ・・・」

な、何がどうなって・・・

「・・・櫛山、これはどういう事です？」

「・・・フッ、悪ぃが狩りの対象、アンタにさせてもらうぜ」

ジジジジジっと、刀と釘バットがぶつかり合い、火花が・・・。

「おい、春吉だっけか？」

「は、はい？」

櫛山が古宇宮相手に話し掛けてきた！！

「そのリアカー引いて、倉庫の中行け」

「はい！？」

え・・・？

「櫛山・・・どういうつもりだ」

おおぉ・・・古宇宮の額にシワが！！

「・・・もう、お前の下で喧嘩すんのは懲り懲りだ。まぁ、謀反ってやつ？」

櫛山と古宇宮は戦闘中！！

・・・今、チャンスだよな！？

何故かは知らんが、相手は仲間割れの模様。
よし、俺はとりあえずリアカーを引っ張る！！

「うおぉ～！！」

高校生三人は重い！！
けど、俺はそのまま倉庫へＧＯ！

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　新訳青上強襲篇・後章

そして、倉庫内

「ぜぇ～ぜぇ～ぜぇ～・・・・」

リアカー重い・・・けど・・・

倉庫内進入成功！！

「・・・はぁ」

疲れた・・・

「ふぅ」

そして・・・

「助けに来ましたよぉぉぉぉぉぉぉぉ～！！」

どうしようか迷ったけど、とりあえず倉庫内で叫んでみた。

で、今俺の目の前には・・・

「えっ・・・」

「た、助け!?」

「マジで!?」

「やったぁ!!」

沢山の人質方!!

人質はみんな、チェーンでぐるぐる巻きに巻かれ、地面に横になっていた。

こんな時に不謹慎だけど・・・蓑虫みたい。

つか、ロープじゃなくてチェーン!?

解けるかな・・・?

「・・・春吉か?」

「はいっ!?」

「やったー」だの「早く助けて」などの喧騒の中、何処からか俺を呼ぶ声が・・・。

「こっちだ!!」

声のした方を見ると・・・そこには

「おお、赤佐か!!」

久しぶりの登場！
ってか、新訳青上篇初登場！！
「やっぱお前、捕まってたのか！！」
「ああ、あの雷雨の日に・・・捕まった」
・・・あの日か。
あ、あの日ってのは、本編４３話の事ね。
って事は
「もしかして、小夜も・・・」
俺は赤佐のチェーンを解きながら質問。
・・・チェーン硬い。
「あ、ああ。多分何処かに・・・痛いッ」
あ、チェーン食い込んだ。
「済まん・・・もうちょいで解けるかな？」
カチャカチャ
チェーン超硬い。
・・・あー、いらいらしてくる。

そして、しばらくして・・・

「ほ、解けた・・・」

「おお、動ける!!」

やっと一人・・・もう指が痛い・・・

「赤佐、テメェも解くの手伝え!!」

「ああ!!」

と、とりあえず人質の解放を・・・

その時!!

「遅ぇぞ!!」

・・・ムムッ、この半男みたいな声は・・・。

とりあえず、声のした方を見る。

そこには・・・

「遅ぇ!!」

「・・・・・」

「・・・春?」

楓に小夜、美羽!!

「み、蓑虫が三匹・・・」

・・・って、今はそれどころじゃねぇな。

「大丈夫か？」

とりあえず解いてやらないと。

「大丈夫な訳ねぇだろバカ吉！！」

・・・人質のくせに、生意気な口だな。

「おい黙れ。黙らねぇと解かんぞ」

「なっ・・・ムムッ」

子供か。

その時・・・

「フフフ・・・」

・・・この無気味な笑い声、まさか・・・。

「逃がしはしない」

「来たか・・・」

刀を持った古宇宮。

何故か笑顔。

・・・そして、櫛山の姿はなかった。

「な・・・」

赤佐、絶賛フリーズ中

「出たな・・・」

蓑虫楓は威嚇中。

「・・・・・」

「・・・うううぅ」

小夜と美羽はさっきから無口。

相当怖いのか？

まぁ、当たり前か。

「フフフ・・・木山春吉、君を殺す」

・・・狩るじゃなくて、殺すかよ。

こ、怖ぇ〜！！

やっぱり怖ッ！！

「は、春吉、あいつは・・・」

赤佐くん、顔真っ青。
赤佐なのに、青。

「・・・赤佐落ち着け。・・・とりあえず、お前は他の人のチェーンを解いてろ」

「えっ・・・」

フッフッフ、もう自己暗示しかねぇか？

相手は刀持ってんだ。
多分、人質達は捕まっている間、飲まず食わずで体力は低下している。

だったら、古宇宮の相手は危険。

もう、俺がやるしかない。
あ、ヤベ、失禁しそう・・・。

その時、俺は一瞬だが気を緩めてしまった。

そして

スッ・・・

ん？

「え・・・」

「フフフ・・・」

え？　何で？

いつの間にか、古宇宮が目と鼻の先に・・・。

「死ね」

そして、刀が振るわれた。

ガキィ～ン！！

油断した。

もう終わった・・・と思ったその時。

「油断してんじゃねぇよバカ」

「全くだ」

その声は前方から。

「・・・え」

古宇宮が振るった刀。
それは、俺の目の前で止まっていた。
夏哉の木刀と、秋馬の鞭によって。

「お前ら・・・」

無事なのか？

「フフフ・・・」

不気味に笑う古宇宮。

「・・・コイツは俺とハゲメガネとで抑えとく。お前は早く人質を！！」

「は、ハゲメガネ・・・フン、瀬良家の美がまだ分からんか」

「二人とも・・・」

二人ともボロボロ。
多分、無理をして・・・

「・・・任せた」

でも、二人の闘志はまだあった。

「赤佐、急いでチェーンを解くぞ！！」

「あ、ああ！！」

これが最後だ！！

カチャカチャ

「ありがと！！」

カチャカチャ

「助かった！！」

カチャカチャ

「遅ぇぞバカ！！」

「うるせぇ！！」

俺と赤佐は次々と人質のチェーンを解いて回る。

その間にも・・・

カキンッ、シュッ！！

「・・・フフフ」

「野郎・・・ッ！！」

「クソッ・・・」

二対一なのに、夏哉と秋馬はおされ気味。
二人とも、相当なダメージを負ってんだな。

「この程度ですか？」

カキンッ！！

「チッ・・・」

「マズイな・・・」

古宇宮の刀が、木刀と鞭を弾く。

「フフフ・・・やはり弱者か」

古宇宮、余裕の笑み。

「・・・ハッ、あんまし調子乗るなよッ！！」

夏哉がその場から一気に跳躍！！

「全くだ！！」

秋馬も反対側から古宇宮に接近！！

挟み撃ち状態！！

「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「はあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

二人は同時に武器を奮う！！

しかし・・・

「遅いですよ」

古宇宮は後ろへ一歩。

そして刀を構え・・・

「・・・フッ」

二人が接近してきたタイミングを見計らい、中央目掛け強烈な斬撃！！

「なっ・・・」

「くそっ・・・」

二人は咄嗟に体を捻り、斬撃を回避。

そして・・・

「そこっ・・・」

体を捻った状態で、秋馬は鞭を振るう！！

シュルッ！！

「・・・ほう」

鞭は古宇宮の刀の柄に直撃！！
刃の先が下に向いた。

そして・・・

「喰らいな」

体制を立て直した夏哉が、木刀を構え、無防備な古宇宮に向かい斬撃を放った！！

しかし・・・

パシュッ！！

「・・・フフフ」

「なっ・・・マジか」

夏哉驚愕。
古宇宮、素手で木刀を受け止めた！！

「何だと・・・」

秋馬も動揺を隠せないでいる。

「・・・弱者達よ、悪あがきはするな」

ズシャッ・・・

次の瞬間・・・

「くッ・・・・」

「チッ・・・・」

夏哉の右腕、秋馬の左手首に斬撃が！！

かなりの速さ。

古宇宮の斬撃！！

「・・・フフフ、遅いですよ？」

そして古宇宮は追撃の体制へ！！

「くっ・・・春吉、人質はまだか！？」

古宇宮の追撃を、木刀で受け止めながら夏哉が聞いてくる。

「スマン・・・あと少しだ！！」

くっ・・・早くみんなのチェーンを解いて、脱出しないと！！

・・・その時

「僕も手伝うよ！！」

リアカーの方から、ヨロヨロ状態の人影が接近。

「冬希！　もう大丈夫なのか？」

その人影は、冬希だった。

「うん。それより早くみんなを！！」

「分かってる！！」

かなりふらふらな冬希。

相当なダメージを負ってんだな・・・

クソッ・・・人質はまだ半分くらい残っている・・・

「痛っ・・・指が・・・」

チェーンを力ずくで解いてきたから・・・指先痛い・・・。

けど・・・。

カチャカチャカチャ

「あ、ありがと」

早くみんなを助けないと！！

その時・・・

「ぐあッ・・・」

「うぅ・・・」

「・・・まだまだだ、僕の足元にすら及ばない」

嘘だろ・・・

古宇宮の目の前で、夏哉と秋馬が・・・倒れた。

あの二人が負けた！？

「次は誰だい？」

くっ・・・化け物かよ・・・。

「・・・次の相手は僕だ！」

その時、冬希がガバッと立ち上がった。

って、ええぇ！？

「梨本・・・君は櫛山に一撃で負けたらしいではないか。そんな君が、敵うと思うのかい？」

「・・・・・」

その時、冬希はそっと背中越しから、彼の武器武器であるボクシンググローブを取り出した。

ってか、そんな所にしまっていたのか。

「・・・掛かってこい！！」

二つの拳を構え、古宇宮を睨みつける冬希。

「・・・フフフ」

冬希・・・お前。

「・・・任せたぞ」

・・・今はとにかく、人質の救助を！！

あと数人・・・

「くっ・・・」

冬希は古宇宮の刀をかわし、右ストレート！！

しかし

「遅いね」

古宇宮は難無くそれをかわし・・・

ズシャッ！！

「痛っ！！」

冬希の脇腹に強烈な斬撃を放った！！

「・・・フフフ、弱い。弱いぞ」

高らかに笑う古宇宮。
一方の冬希は、血だらけの脇腹を押さえ、悶絶状態。
グロい・・・

「フフフ・・・情けでも掛けてあげようか」

そして古宇宮は、冬希の後頭部目掛け・・・

ガンッ！！

斬撃を入れた！！

「ふ、冬希！！」

俺、思わず絶叫！！
数分の死闘の末、冬希は倒れたのだ。

「・・・みねうちです。情けだと思って下さい」

古宇宮・・・

「フフフ・・・やはり、弱者は弱者だな」

クソッ・・・

「フフフ・・・逃がしはしない」

ヤバイ・・・まだこっちには人質が・・・

・・・おし。

「赤佐、残りの人質は任せた」

「えっ、また？」

俺はもう、やるしかない！！

男春吉、勇気を持て！！

「・・・よぉ、古宇宮くん！！」

「次は君か」

まずは挨拶。

古宇宮・・・相変わらず憎たらしい。

「て、テメェを倒すのはこの俺だ！！　覚悟しろ！！」

「・・・フフフ」

わ、笑った！？

「わ、笑ってんじゃねーよ、バカ！！」

ズシャッ・・・

次の瞬間、俺の腹に、刀の斬撃が・・・

「うぅっ・・・」

は、速い・・・

「君は・・・やはり、殺すか」

うぅ・・・血が・・・

「フフフフフ」

くっ・・・痛い・・・もう嫌・・・

「次、いきますよ」

そして斬撃二発目！

「っ・・・！！」

俺は痛みを堪えつつ、後ろへ引く。

スッ・・・

刀は俺の数センチ前方を通過！！
あ、危ない！！
その時・・・
「春吉、人質は全員避難したぞ！！」
赤佐の声・・・
「逃げられたか・・・まぁいい。とりあえず君を殺そう」
全員逃げたか・・・
なら、俺も早く逃げないとな・・・
ズシャッ！！
「ぐあっ・・・」
また斬撃を喰らった。
「・・・フフフ」
クソッ・・・が・・・
「そろそろ出血もかなりの量に・・・では、これで終わりにしますか」
アカン・・・
「さようなら」

く・・・そ・・・

ガコンッ！！

「なっ・・・！！」

その時、古宇宮の動きが止まった。

「はぁ～はぁ～、後ろがお留守だぜ」

「貴様・・・ッ」

櫛山のバットが、古宇宮の後頭部を捕らえた。

「櫛・・・山ぁ・・・」

「へっ・・・油断したな」

櫛山もボロボロ。

「貴様・・・確か後頭部を斬ったハズ・・・」

「残念だったな。ありゃ、急所を外してた」

これが、総攻撃の始まりだった。

「オラッ！！」

バコッ！！

「しまっ・・・グハッ！！」

倒れていた夏哉が持てる力全てを使って起き上がり、一気に木刀で奴の腹に突きを放った。

「油断大敵だぜ・・・古宇宮」

夏哉は全身血だらけ。

おそらく、もう気力だけで立っている状態。

「クソッ・・・ッ」

古宇宮は刀を構え、二人から一旦距離を取る。

しかし・・・

「フンッ・・・」

まだ意識のあった秋馬の鞭が、古宇宮の手に直撃！！

「痛ッ」

カラッ～ン！！

古宇宮は、そのまま刀を落とした。

「油断したな、庶民」

「しまっ・・・」

古宇宮は咄嗟に刀へ手を伸ばす。

しかし・・・

「オラッ！！」

「フッ・・・」

「セイッ！！」

櫛山のバット、夏哉の木刀、秋馬の鞭が、この連続攻撃で完璧に流れを崩した古宇宮の四肢を狙う。

「ぐはっ・・・」

古宇宮は夏哉の木刀を刀で受け止めた。

しかし、秋馬の鞭と櫛山のバットは直撃！！

そして・・・

「えいっ！！」

フラフラになりながらも、何とか立ち上がった冬希の拳が、古宇宮の顔面を襲う。

ガッ！！

「クソッ・・・」

俺を殺すために見せた、一瞬の隙。

それが、完璧とも言えた古宇宮の唯一の失態。

その一瞬の隙のせいで、流れは変わった。

「くっ・・・」

古宇宮は刀を構え、後退。

「逃がすかっ！！」

しかし、秋馬が追尾。

鞭を振るう！！

シュルッ！！

「くそっ！！」

鞭は古宇宮に直撃！！

「フッ！！」
「はっ！！」
「えいっ！！」

そして、夏哉、櫛山、冬希が一気に畳み掛ける。

「うぅ・・・」

古宇宮は、完璧に流れを失っていた。

「とどめはお前がしろ」

「うぅ・・・」

俺の目の前には、ボロボロの古宇宮。
お互い、もう立つのがやっと。
周りのみんなに至っては、全員床に倒れている。
俺の武器、それはこの拳そのもの。

・・・いや、カルシウムは毎日取ってるし。

「おらあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺はありったけの力を込めて、拳を放った！！

「・・・フッ」

うわ～、傷口超開いた。痛い。

けど・・・

ドカッ！！

痛かったけど、その瞬間、全てが終わった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　新訳青上強襲篇・後章（後書き）

バトル描写を結構加筆してみました！！
いかかでした！？

次回はなっくん主役の青上篇後日談！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　夏の音色は透明で

「なっくん、今日暇だよね？」

「あ？」

7月のとある日。
学校終わりの放課後。
2年1組の教室。

「今日さ、ウチにこない？」

「……何故」

いつもウザったいカオだが、今日は何故かそわそわしている。

「何故って……だって……と、とにかくウチにおいで！！」

「……」

答えになってない。

「……カオ」

「な、なに？」

「……俺、今日は帰るわ。眠いし」

最近は意味もなく夜の町をぶらぶらしてる。
……刺激を求めて。

俺は……青上には勝ったが、古宇宮には負けた。
香音を……守れなかった。
今はヘラッとしてるコイツも、救助当時は……

俺はアレ以来、毎晩町をふらついては、不良共と喧嘩の毎日。
理由は……

「なっくん、どうしたの？」
「ん？　ああ……」
いけね、ボーっとしてた。
「眠いって……もしかして夜更かし？」
「あ、いや……」
まぁ、実際は夜更かし……。

「もしかして授業中寝てたとか？」

「あ、ああ……そ、そうだ」

本当は寝てねぇけど。

「だったらもう大丈夫だよね？」

「……あ？」

「じゃあウチにおいで～！！」

「なっ！！」

俺の腕を掴み、ぐいぐいと引っ張るカオ。

「ちょっと待て、まだ行くとは……」

「はい行こう！！」

水岡果樹園

ここがカオの実家。

林檎やら葡萄やら、果物沢山の果樹園。

昔はよく来たな……

「今日はお父さんもお母さんも出荷でいないから、遠慮せずにどぞ！！」

果樹園から数十メートル離れた所にある家。

この家の2階の奥部屋が、カオの部屋だ。

「……やっぱ帰る」

カオに連れられ（正確には拉致られ）、家の前までは来てみたものの……

やっぱり、いいや。

「ちょいと、ここまで来てそれはナシだよ！！」

慌てふためくカオ。

何故だ。

「ってかよ」
俺はポケットに手を突っ込みながら聞く。
「今日は一体、何の用なんだ」
ガチで帰って寝たい。
「えっ……そ、それは……」
もじもじなカオ。
顔赤ぇ。
何考えてんだコイツ？
「と、とにかく水岡ハウスへいらっしゃ〜い！！」
……はぐらかしたな、この野郎。

「……」
はぁ〜。

結局、俺は家に上がった。
いや、上がらされた。
強引に。

「まぁ、どぞどぞ。お気を使わず！！」

気を使った覚えはないが……。

……カオの部屋は、まぁ、普通の女子の部屋。
小物やらぬいぐるみやら散乱中。

片付けは苦手。

「はい、座布団！！」

「サンキュ」

言い忘れたが、カオの部屋は和室。
床の間まである。

……ちなみに、今その床の間には衣類やら何やらがいっぱい。
バチ当たるぞ。

ドッ！！

「痛ッ、たんすに足ぶつけたぁ～！！」

ほらな。

「誰だ、ここにたんすなんか置いた奴は！！」

お前だろ。
全く……。

「で、何の用なんだ？」

あれから少しドタバタがありつつも、とりあえずは本題へ。

「……」

カオは何やらモジモジ。
芋虫か。

「……なっくん」

「あ？」

なんだコイツ？
目が泳いでる。

「こ、これは、あの時の……お礼なのですッ！！」

次の瞬間！！

グッ！！

「ッ……！！」

カオが抱きついてきやがった。

そして、

ガゴッ！！

「ぐおっ！？」

勢い余って後ろへ転倒。
後頭部強打。

……お星様が見えてる。

「なっくん……ありがとね」

耳元でささやく香音。

なんだ……これは……

「この前、助けに来てくれて、本当に嬉しかった」

……やめろッ

「とても……安心した」

……離れろッ

「なっくん……」

駄目だ……ッ

「……離れろ」

「……えっ？」

俺は、何言ってんだ？

「離れろ……お前はそんなんじゃねぇ」

「……」

ほんの、一瞬の出来事

アイツは何を考えてたかは知らない。

だが……

「俺とお前は腐れ縁だ。ただ、それだけ。それ以上はない」

「……っ」

俺は……何を言ってんだ！！

「……俺、帰るわ」

「……うん」

その時、俺の何かが崩れ出した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　夏の音色は透明で（後書き）

さてさて、次回よりストーリーは三姫本編に戻ります！！

新章「バスケ部夏合宿篇」！！

お楽しみに！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　サンヒメハンター

ここは……とある豪雪地帯の中にある雪山。

辺り一面に雪が積もり、吹雪が視界に白いフィルターをかける。

空には灰色の分厚い雲。

そして、その絶壁の雪山の山頂。

山の下にある小さな村すら、石ころのように見えてしまう程の高さ。

そんな雪山の山頂に、四人の狩人……ハンターがいた――――

「……ふぅ、ようやく見つけたぜ化け物ッ！」

山頂に居座るは、金色の獅子……

彼――――太刀使いの春吉は、その背中に掛けてある鞘から、一筋の太刀を抜いた。

「待って春っ、1人で行ったら間違いなく返り討ちだわっ！」

同じく、ランス使いの美羽も背中越しのランスを抜き、構える。

「……2人共、注意をそらさないで」

弓使いの小夜は、自らの弓を構え、狙いを正面のモンスターに合わせる。

「……何で俺まで」

そして、片手剣使いの夏哉も、渋々剣を構えた。

「明らかに俺、場違いだろ……」

「来るぞッ！」

春吉の叫び声が、辺りにこだました。

そして、4人の目の前にいるモンスター――――金獅子の異名をもつ最強のモンスター、カエデが一気に接近！

猿のように4本足で走り、拳を構え、息を吸った。

「イカンっ、バンドボイスが来るぞっ！」

春吉のその言葉に夏哉と美羽は盾でガードの姿勢。

小夜は1歩後退。

春吉は回避行動に移る。

そして――――

『最近、本編での出番が少なぁ～いッ！』

「うっ……」

強烈なバンドボイス。

春吉は回避に失敗し、その場で耳を塞ぎ膠着。

「春っ！」

その時、カエデは動かない春吉に接近！

拳を振り上げた。

「……させない」

咄嗟に小夜は弓を構え、カエデの振り上げた拳へ矢を放つ！

シュッ！！

『痛いっ！』

小夜の矢に、カエデは一瞬怯んだ。

「……今だっ！」

その隙に春吉はカエデの前から退避。

そして、美羽のランスでの突進が、カエデに向かい放たれた！

「うおおおぉぉぉっ！」

そして反対側からは、夏哉が剣を振り上げ、一気に切りつける！

「おらあああぁぁぁっ！」

『いつもこんな役回りばっかでもう嫌ァッ！』

その時……

「あ、危ないッ！」

カエデはその場から1歩後退し、美羽と夏哉を視界に捉えた。

そして……

『ジャンプっ！』

空中へ跳躍。

「なっ……」

「しまった……」

今は美羽も夏哉も無防備！

そして……

『くらえ、元気玉ッ！』

跳躍したカエデの手から、金色の玉が放たれた。

「チッ……」

夏哉は一気に身を翻し、ギリギリで回避体制に体を持っていく。

しかし、美羽は……

「うあっ……」

「美羽ッ！！」

突進状態だった美羽は、その元気玉を避けきれずに直撃。

その場で方膝を着いた。

『最近出番があるからって、浮かれるなよ！』

「なんて野郎だ……まだ小夜の方が新章にすら出ていないと言うのに……」

春吉はカエデを睨み付けつつも、美羽に接近。

「小夜、夏哉、援護を頼むッ！」

そう言うと、春吉は玉を食らってむせている美羽の元へ。

「大丈夫かっ？」

「うん……何とか」

そう言いつつも、腰のポーチ内の回復薬に手を伸ばす美羽。

「俺、ハチミツ持ってるぞ。調合してGにするか？」

「大丈夫……」

そうして、美羽は回復薬のフタを開けた。

その頃……

「オラッ！」

ジュサッ！

『地味に痛い！』

夏哉はカエデの腕に斬り掛かっていた。

「チッ……意外と硬いな。荏咲、お前は弓で頭の角を狙ってくれ」

「……うん」

そして小夜は弓をカエデの頭部から生えている2本の角に、狙いを定めた。

『あたしだって、海行って遊びたい！』

「……そこは同意」

そして小夜は矢を放った。

「チッ……海だ海だってお前ら、波紫先輩の海合宿はお遊びじゃねーんだぞッ！」

夏哉は先ほどと同じく、狙いを腕に。

『でもやっぱ海行ってみんなと遊びたぁーい！』

その時、カエデは勢いよく腕を振り回し、連続ナックルの構え。

「くそっ、なら波紫先輩のドS合宿に耐えられるのかお前っ！」

夏哉はナックルを見定め、ひとつひとつ確実に回避。

『小夜だって、出番や海とか合宿とか行きたいよな！？』

「……大丈夫、次章は私メインだから、今は我慢」

「何リアルな話してんだお前ら……」

夏哉はナックルを回避しながらツッコミ。

『チクショー！　あたしのパートはナアナアで終わっちゃったって言うのに……小夜ずるい！」

その時、カエデは小夜の方へ顔を向け……

『ビームッ！』

まさかの口からビーム発射！！

「……っ！」

突然の事に、小夜は咄嗟に動けない。

「マズイっ！」

夏哉と小夜とは距離が微妙に離れている。

つまり、助けに行こうが間に合わない。

『覚悟っ！』

そして、ビームが小夜に達しようとした、

その時……

ガキンッ！

「……ふぅ、間に合ったわ！」

小夜の目の前。

そこには、盾を構えビームから小夜を守った、

「……美羽っ」

美羽の姿があった。

「カエデっ！」

そして、美羽の登場に驚き、一瞬隙が出来たカエデの背後には……

『春吉ッ！？』

太刀を構えた、春吉の姿があった。

「カエデ、お前は出番だ出番だって……」

カエデは咄嗟に反転しようと試みるが、時既に遅し。

「記念すべき本編１００話の後書きコーナーに出れるんだから、それで我慢しなさぁ～いッ！」

そして春吉は、太刀を降り下ろした。

『ＤＪ赤佐相手のアレかぁ～！！』

渾身の一撃。

それを食らったカエデは、目を回しながらその場に倒れた。

どすーん！

「……ふぅ、長い戦いだったぜ」

狩人春吉、金獅子相手に、ここに勝利を勝ち取った！

ガッツポーズ！

「ってか、メインヒロインを本編に出さない作者も作者だよな」

その一言が、後に彼の出番の量に響き……

「だぁあああぁぁ！！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　サンヒメハンター（後書き）

とりあえず、全国のモンハンファンの皆さん、なんかすみませんでした。

parallel story _01

『お父さんとお母さんはちょっくら、富士の樹海まで夜逃げしてきます。探さないでね春吉（＊^＿^＊）』

「……」

ある春の朝、俺がベッドから起床し、台所へ行ったら……

上記のような手紙が机の上に置いてあった。

「……は？」

……俺、寝ぼけてんのかな？

これ幻覚？

俺は寝ぼけている頭をゴツンっ！

ちょっとグーで殴ってから、再度その手紙を見てみる。

……そこには、やっぱりその手紙が。

「……意味分からん」

さっそく意味不明な展開だ。

俺の名前は木山　春吉。
今年で高校２年生の１６歳。
イエーイ青春。

現在俺は、机の上にあった両親からの置き手紙とにらめっこ中。

「……夜逃げ？」

展開が急すぎる。
ちょっと待とうぜ俺！

とりあえず冷蔵庫から牛乳出して、ゴクッと一口。

そして棚からパンを一つ取り、パクり。

うん普通の朝だ。

しかし……

俺はパンを食べながら、家の中を捜索。

二階へ行ったり、トイレ行ったり、物置小屋や押し入れ見たり。

途中階段に足ぶつけてもがき苦しんだ場面は省略で。

「……マジかよ」

そして俺は気付いた。

……昨日までいた両親の姿が、見当たらねぇ！

どこにも見当たらない！

「嘘だろ……何このパターン！？」

物語第一話にして、両親まさかの夜逃げ！

「ちょ、ちょっと待とう！　一旦落ち着こう俺！！」

と、とりあえず居間へ来た俺。

はい一旦座って。

……さっき家の中を回った時、両親の荷物や私物は消えていた。

そして、両親の姿はない。

「……はぁ」

ちょっと不安だ。

これ、どっきりとかじゃないよね？

「……マジでどこ行ったんだ、あの二人？」

手紙には富士の樹海と書かれていたな、夜逃げ先。

……え？

「富士の樹海？」

俺はもう一度手紙を凝視。

……行き先、富士の樹海と書かれていた。

不謹慎だけど、俺の富士の樹海イメージは……

自殺の名所

「うっそぉぉ！？」

まさかの！？

俺、ちょっと跳び跳ねた。

ちょ、ちょっと待てよ！！

富士の樹海に夜逃げてアンタ……変なフラグ立ってないか！？

マジでか、マジなのかオイ！！

ちょっと焦る。

「くそっ……ま、まさか本当に……」

なんだよ！！

第一話から重すぎだろコレっ！！

「……そういや」

焦っていた俺、ちょっと昨日の事を思い出す。

ウチは両親の中は微妙だったと思う。

気弱な父に、気の強い母。

亭主関白って言葉はウチには無い。

たまに喧嘩したり、言い争っていたりしている所を、度々目撃した事もあったし。

息子は俺だけ。

一人っ子や。

まぁ、気ままに暮らして早１６年。

たまにそんな両親の仲介役なんかをしつつ、普通に生きて来たのであって。

本当に至って普通で。

しかし昨日、俺は見てしまったのだ。

たまたま机の上にあった１枚の紙。

白い紙に黒インクの文字。

そこには、返済って文字が書かれていた。

「……もしや」

昨日は何も気に止めていなかったが、よくよく考えると……

返済と書かれた紙。

……借金？

ちなみに息子の俺は何も知らんぞ。

借金なんて聞いてないし！！

「……これは、きっと俺の思い違いだ」

きっとこれ、両親はどこかに旅行にでも行ったんだ！

きっとそうだ！

多分ジョークとかで夜逃げとか書いたんだ！

そうだよきっと！

じゃないとやってやれないよこんなのッ！！

「……はぁ」

結局、俺はこう言う結論にたどり着いた。

両親は今、きっと旅行へ行っている（多分……いやきっと）

そしてその事をジョークで（ここ重要）で夜逃げと書いた。

富士の樹海も真っ赤なウソ（じゃないとマジやべぇよ！！）

つまり、そういう事だ。

「……全く、なんて両親なんだ」

俺は制服に着替えながら頭をポリポリ。

手紙には旅館のおばあちゃん家に行けとか、そんな事は書いて無かったから普通に学校へ行かないといけない。

ってかウチのばあちゃん家、普通の農家だし。

旅館じゃねぇし。

「……まぁ、生活費はバイトで何とかなるか」

そう呟きながら、俺は身支度を終える。

時刻は……午前7時５０分過ぎ。

……え？

俺はもう一度時計をチラッ。

時刻は……

「５０分！？」

やばい！！

ち、遅刻だッ！！

電車がッ！！

俺は大急ぎでカバンを持ち、靴をはき、家を出た。

空は晴れて、雲一つない青空。

俺はとにかく、走るしか無かった。

ｐａｒａｌｌｅｌ　ｓｔｏｒｙ　－０２（前書き）

ｐａｒａｌｌｅｌシリーズの説明は、８月６日投稿の活動報告ページを見て下さい。

今回は第２話です。

なんか３人のヒロインの中で、楓は何故かあんまり評判が良くないんですよね。

何故だろう？

parallel story _02

「なぁ春吉、暇なら一緒に帰ろうぜ！」

「ん、ああ、別にいいぞ」

葉城高校、放課後。

自分のクラスで波動拳大会に勤しんでいた俺に話を掛けてきたのは沢那　楓。

モロ体育会系のボーイッシュ少女だ。

「お、春吉。お前自ら大魔人に付いて行くとは……地獄行きになっても知らんぞ？」

こう言ってくるのはマイバカ友の重原権三朗くん。

葉城高校顔面偏差値の底辺だ。

「大丈夫だよ、今は機嫌いいみたいだし」

裏を返せば、機嫌悪い時には大魔人化すると言う意味。

だから機嫌悪い時の楓には近づくべからず。

「何してんだ春吉？　早く行くぞ！」

廊下から聞こえる楓の声。

「ああ、今行く」

俺は波動拳大会の勇士達に別れを告げ、いそいそと廊下へ。

楓とは幼稚園の頃からの仲だ。

実家が柔道場という環境で育った楓は、小さい時から喧嘩っぱやい性格。

見た目も黒髪ショート＋日焼け肌＋低身長って事で、結構やんちゃ系

まぁ、黙ってりゃそこそこ可愛いんだが。

「最近さ、部活の連中が軟弱でさ、ちっともやる気ってモンを感じないんだよなぁ」

学校からの帰り道。

空には既に沈み掛けた太陽が輝いている。

そんな中、楓は何やら部活の事を話し出す。
ちなみに楓は柔道部所属。
「軟弱って……そりゃただ単にお前が強すぎなだけじゃ……」
幼稚園の時から楓の【幻の右】を喰らい続けている俺には分かる。
コイツが強すぎて、絶対仲間が付いていけてないんだ。
絶対そうだ。
「強いって……そんな事ないよ。だってまだ部長には勝てないし」
「じゃあ何？　部長以外には全員に勝ったの？　それを強いって言うんだよ沢那くん」
「そうかなぁ」
「そうじゃなきゃ何なんだよ、お前に負けたヤツが全員ザコみたいになるじゃねぇか」
ちなみにだか、葉城の柔道部は結構強い。
葉城高校運動部3強の1つでもあるし。
残りの2つはテニス部と弓道部だったりする。
「でも……」

「何だお前、そんな実力あんのに自信はねぇのか？　なんつー贅沢なヤツっ！！」

「う、うるせぇな！」

なんだかなぁ。

コイツは基本真っ直ぐな人間で、そんなにくよくよする事が少ないヤツだ。

むしろ真っ直ぐ過ぎて直視出来ない事も多々。

けど、たまにだけどコイツにも悩む時があって。

その時のコイツの顔は、本当女の子みたいな顔して……なんか、ほってはおけなくなるっつーか、何つーか……。

「……アタシさ、もしかしたら次の大会、大将のポジションやるかもしんないんだ」

「……は、大将？」

突然、ボソッと呟くように言った楓。

その顔はまさに、不安に怯える女の子の顔だった。

「何て言うか、まだアタシには大将は早いって言うか、向いてないって言うか……」

いつもは見せない、ウジウジした楓。

ちなみにいつもの楓は、

『春吉！　何か腹減ったから食べ物ちょーだい！！』

『食べ物！？　ってか今俺何も持ってないんだけど……』

『えー！　お腹減ったんだけど！』

『知るかっ！　……あ、そういや権三朗がスルメイカ持ってたような……』

『え、マジで？　あ、権三朗いた！　おーい権三朗ぉ！！』

『……女子高生がスルメイカに引き寄せられるって、どうなんだよ』

こんな感じ。

基本ウジウジしないで、周りの事も気にしないで（つまり空気読まないで）、本当に真っ直ぐ我を行くって感じなのに。

今日の楓にいつもの覇気なし。

「やっぱりさ、大会とかの大将って部長とかがやるべきだよね」

「……俺は、お前でもいいと思うけどな」

実際強いんだし。

「でもアタシ……」

弱気な楓の瞳は、まるでビー玉みたい。

何か女子っぽいって言うか。

まぁ実際女子なんだけど。

「……よし」

俺は何か大将っていうプレッシャー？　に負けかけている楓の覇気を取り戻すべく、作戦を立てる。

コイツがくよくよするなんてガラじゃねぇ。

コイツにはいつでもウザイくらいの真っ直ぐでいてもらわないと！

そうじゃないと、何かこっちが気持ち悪い！

「なぁ楓」

「……何？」

「今からケーキでも食べに行かね？」

「……ケーキ？」

俺は道路の向かい側にあるケーキショップを指差す。

「ほら、最近改装したっていう、あの店だよ」

あの店は以前、とんでもなく床の凸凹が多いっていう理由で苦情が殺到し、それだけでまさかの閉店間際まで追い込まれたという伝説の店。

最近になって新たに改装し、凸凹がなくなり歩きやすくなったと評判。

ちなみにケーキの味は普通らしい（美羽談）。

「でも、今ケーキって気分じゃ……」

「スルメイカに反応してたヤツが何言ってんだ！　ほら、ちょっとならおごってやるから、行くぞ！」

くよくよした時や、落ち込んだ時は甘いモノ食べて元気出す！
これ鉄則！

「……」

相変わらず俯き気味の楓。

「ほらっ！」

俺はそんな楓の腕を取り、ちょい強引に店の方へ歩き出す。

「うわっ、ちょ、春吉っ！！」

「だーいじょうぶ、俺の財布を信じなさい！」

「そ、そうじゃなくて……」

「だーいじょうぶ、店内の凸凹はもうないって美羽が言ってたし！」

「……そうじゃ、なくて……その」

「だーいじょうぶ、お前に大将は出来るよ」

「……えっ」

その時、楓は顔を上げた。

「大丈夫だ、俺が保証する。お前は強い！　だって幼稚園時代、この俺を唯一泣かせた女だしな！！」

相変わらず楓を引っ張っている俺。

視線は前。

「それに、お前は部活サボってないし、家でも柔道やってんだろ？
そんなお前が大将だなんて、ピッタしすぎるだろ！」

「……でも」

「くよくよすんな、自分の力を信じろ！」

俺は力強く言った。

「お前が大将だって、顧問や部長が決めたんだろ？　つまりそれは、顧問や部長がお前の力を信じてるって事なんだよ」

「……」

「なのに、当の本人が自分を信じなくてどうすんだよ。せっかく大将って役割を与えて貰えたんだから、精一杯大将やって、頑張って来い！」

「春吉……」

「自分を信じろ、楓！」

俺、良いこと言ったんじゃね？

なんか主人公っぽかった？

「……春吉」

「ん？」

俺が振り返ると、そこには後ろを見ている楓の姿が……って、

「春吉、もうケーキ屋過ぎてるんだけど」

「……あ」

行くはずだったケーキ屋、既に遥か後ろに見える……。

か、語りに夢中でケーキ屋見逃したッ！！

は、ははは恥ずかしいぃ〜！！

ってか俺のバカっ！！

こんなの……こんなの主人公としてダメだぁっ！！

うがあああぁぁぁぁぁぁっ！！

って嘆いていると。

「……なんかふっきれた」

ボソッと、楓が呟いた。

「……春吉、お前ケーキおごってくれるんだよな？」

もう、この時の楓の顔にはくよくよなんて無かった。

「あ、ああ……」

「だったら山盛り食ってやる！」

「山盛り……って、え？」

もう既にいつものニコニコ笑顔に戻っていた楓。

今は逆にその笑顔が怖い。

山盛りって何だよ？

「さぁ～て、腹いっぱい食うぞぉ！」

そう言って、ケーキショップへダッシュする楓……ってか、

「ちょ、ちょっと待て！　俺は少しおごるって言っただけで、全部はおごらな……」

「春吉、ゴチ！」

そう言って、あっという間に店内へ入っていく楓。

「だあああぁぁぁぁぁぁっ！！」

俺は財布の中を思い出す。

確か、英世が3枚……

……ヤバい。

「か、楓！　待ってぇ～！！」

こうして、今日俺の財布から英世3人が消えるのでした。

ｐａｒａｌｌｅｌ　ｓｔｏｒｙ　－０３（前書き）

今回は本編第３話です。

今度は楓と違って、逆にすこぶる評判の良い小夜回。
って事で、今回はサービス回でもあります。

何がサービスなのかは読んでみれば分かります。

parallel story _03

「アバッ！！」

俺は顔面にボールを食らった。

顔に来る物凄い衝撃。

歪む鼻。

そして流れる、一筋の鼻血……

今は学校、体育の時間。

やってる事はサッカー。

そして俺はゴールキーパー。

正直言ってフォワードがやりたかったのだが、ジャンケンで負けて仕方なくゴールキーパーになった俺。

「……はぁ」

で、体育監督の教師の合図で、ゲームはスタート。

「はいじゃあ始めるぞ。……プレイボール！！」

「先生それ野球です！」

とまあ始まった体育サッカー。

俺は渋々ゴール前で何となくの構えをし、

開始１０秒でボールが相手に渡り、

開始２０秒でこっちチームのディフェンスが抜かれ、

「……あ」

っという間に相手フォワードと一騎討ち状態に！！

ってか

「ウチのチーム弱ぇ～！！」

そして……

ばちこーん！

相手のタイガーシュートが見事俺の顔面にクリーンヒット！！

「ぐはっ……」

ボールが俺の顔でバウンドし、斜め上へとはねあがる。

辺りに飛び散る、俺の血液（鼻血）！！

俺はその衝撃で盛大にぶっ倒れた。

「あ、春吉が開始２０秒で倒れた！」

「うわっ、なんかすげぇ音したぞ！！」

「鼻血の量がハンパねぇし……」

「先生、木山君がタイガーシュートに倒れました！！」

「なんだと、デッドボールかっ！？」

「だからそれ野球です！」

何だか、野郎共がいそいそと掛けよって来る。

ちなみに俺はゴールの中でぶっ倒れ中。

なんだか……視界がぼやけてきた……

「先生、早くっ！」

「そ、そうだな。デッドボールなら早く塁を回せ！」

「だから野球だよそれ！」

「……とりあえず着いたな」

現在、俺は保健室に来ていた。

そう、サッカーで大量出血したので、輸血しに保健室。

「しっかし、あのタイガーシュートは反則だろ……」

などとぼやきつつ、保健室の扉をノック。

「失礼します」

ガラガラっと引き戸を開け、保健室へ入室する俺。

しかし……

「……あれ？」

室内には誰もいなかった。

ってか養護教諭どこ行った？

仕事しろ。

「……いねぇのかよ」

参ったな……

とりあえず保健室の中を観察。

薬品棚に、清潔な水道、保健室専用冷蔵庫、身長計体重計、そして

ベッド……って、

「……ん？」

保健室の一番奥のベッド、そこに誰かが寝ている。

制服姿の女子だ……ってかアイツは、

「……もしかして、小夜か？」

ベッドで寝ていた女子生徒。

それは俺の幼なじみの荏咲　小夜だった。

「……春吉？」

俺の声に気付き、ゆっくりと起き上がる小夜。
その顔はほんのり赤い。
「どうしたお前……風邪か？」
目の前にいる小夜の目はとろんとしていて、息も若干荒い。
「……そうみたい」
相変わらず単調な口調で話す小夜。
「おお……だったら寝てろ寝てろ。そんでさ、保健の先生知らないか？」
「保健の先生なら……さっき、職員室に行くって……」
なっ……
風邪引いて寝てる生徒置いて職員室だ？
「なんか……用事があるって……」
「そうか、わかった。小夜、お前は寝てろ。保健の先生探してくるから」
ったく、本当に必要な時に限って、養護教諭は保健室にいないんだから。

仕方ない、ちょっくら職員室に……
と思った、その時。
「……待って、春吉」
「ん？」
職員室へ行こうとしていた俺を引き留めたのは、ベッドで寝ている小夜。
「どうした？」
「……」
人を呼び止めて置いて無言になる小夜。
相変わらずその顔は赤く、目も若干タレ気味。
「……」
「何？　なんかあんのか？」
「……えっと」
「ん？」
「……お願いがある」
「何？」

「……汗、拭いて欲しい」
小夜からのお願い。
それは汗拭きでした。
ああ、熱あるから汗かいたのか？
「ああ、別にいいけど……」
「……ありがと。じゃあ、お願い」
そう言うと小夜は再び起き出して……
ワイシャツのボタンを外し始めた。
って、
「うおっ！？　ちょ、小夜さん何してんの！？」
「……汗、拭いてもらうから、ワイシャツ脱ごうと」
とか言いつつも、すたすたとボタンを外す小夜。
俺は思わず視線を窓越しの外へ。
「待ってくれ、俺どこ拭くの？」
「……体」

「そ、そりゃそうだけど……」
背後から聞こえる、ボタンを外す音。
カサカサってワイシャツの擦れる音が、なんかちょっとヤバい。
その時、背後から肩をちょんちょんされ、
「……これタオル。背中お願いできる？」
「……あ、ああ」
俺は背中越しにタオルを受け取り、ちょっと勇気を持って振り返る。
「……っ！」
そこにはベッドの上で座っている、小夜の白い背中があった。
ぶっちゃけ超綺麗。
本当に肌、白いな……
スベスベそう。
「……じゃ、じゃあ拭くぞ」
思わず言葉に力が入ってしまう。
だって男だもん。
そして唾を一飲み。
俺は変態か？

いや、思春期だ。

「……あ、待って」

その時小夜は自らの腕を背中に回し……

パチッ

「……ッ！！」

小夜は自らのブラのホックを外した。

ちなみに色は白……げふんげふん。

ってか、

「……ッ！！」

は、鼻血がまた出そうっ！！

「……じゃ、じゃあお願い」

きゅっと前屈みになるような姿勢を取った小夜に、ちょっと掠れた声でお願いされた。

俺の目の前には、丸まった小夜の背中。

「……」

ちなみに俺、めっちゃ今ヤバい！

そ、そういえば。

よくよく考えると、いまこの保健室には俺と小夜しかいないのであって。

しかもベッドの上で。

小夜は上半身に何も身に付けていない状態であって。

俺の理性が悲鳴を上げています。

ってか小夜って、こんな大胆な子だったっけ！？

「じゃ、じゃあ……」

俺は逸る気持ちをぐっと抑え、タオルをそっと小夜の背中へ……

スっ……

な、なんか凄い。

小夜の背中からは汗の匂いよりも、何かいい匂いが……。

保て、俺の理性を保て！！

「……ごくっ」

思わずまた唾を飲んでしまった。

「……っ」

一方の小夜は、黙り混んでしまっている。

俺は極力視線をそらしつつ、もう急いで背中を拭く事に専念。

ああぁ……

「……ありがと。だいぶ楽になった」

「ど、どどどういたししししままましてててて」

テンパり過ぎだろ、俺。

俺はタオルを小夜に返すと、急いで視線を外へ。

ふぅ〜……

何か色々と危なかった……

その時……

ばさっ

「……ふぅ」

「さ、小夜？」

なんだか衝撃を表す音が背後から聞こえ、俺、思わず振り返る。

そこには……

「……暑い」

「……っ！！？」

そこには、ブラもせずにただワイシャツを羽織っただけの小夜が、ベッドに仰向けで……って

「ぶほっ！！」

思わず鼻血がリターン！！

てぃ、ティッシュ！！

「……春吉」

「な、何か！？」

俺は保健室の机の上にあったティッシュボックスからティッシュを取り、鼻にイン！！

鼻栓完了！！

「……暑いから……靴下、脱がせて」

「ぶほっ！！」

鼻栓が一気に真っ赤へ早変わり！

「……お願い」

「ちょ、ちょっと待っ……」

小夜は顔を真っ赤にし、息も荒く、かなりつらそうにベッドで横になっている。

……どうする、俺？

理性大丈夫？

今二人きりで保健室よ？

理性本当に大丈夫？

「……はぁ、はぁ」

つらそうに息をする小夜。

……こんな時に俺は何を想像してんだ。

この変態主人公めっ！

エロ魔神か俺はっ！！

「大丈夫か小夜？　……今脱がしてやるから、ちょっと足上げろ」

俺の言葉に、ちょっと辛そうに足を上げる小夜。

俺はその隙に小夜のニーソに手を掛けて……

一気にスッと脱がす！

しかし……

白く、艶のある太もも。

ぷにぷにのふくらはぎ。

細めの足首。

足の指先まで綺麗なラインを保つ小夜の足に、男春吉はヤバかった。

「い、いかんっ！」

理性が、理性がぁっ！

俺は小声で呟き、急いで視線を反らし……

しかし。

今、小夜は制服、つまりスカートであって。

靴下を脱がすべく、足を上げてるのであって。

その……視線反らした先に……す、スカートの中が……

「……純白ッ！！」

もう鼻血が止まらなくなってきた！

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい

ヤバいヤバいヤバい！！

思わず俺の息が荒くなる。

もう……理性が……

「……春吉」

「な、何……？」

ベッドで横になっている小夜の顔は、赤い。

「……今、あ、暑いからさ」

「ああ……」

「その……」

「ん……？」

「……ぱ、パンツも……脱がせて……」

「もう無理だあああああぁぁぁぁぁぁッ！！」

「……はっ！！」

その時、俺は目を覚ました。

「あ、先生！　木山君が目を覚ました！」

「本当かっ！　ホームランか！」
「もう先生意味分からないっ！」
な、なんだ……
空が見える……
ってかここ、校庭？
俺、校庭に倒れてる？
回りには野郎達。
しかも覗き込まれてるし、顔。
「大丈夫か春吉？」
そこにいたのは同じクラスの赤佐君。
「お前がタイガーシュート食らって気絶したと思ったら、突然ニヤニヤしだして……」
「……は？」
何？
もしかして今までの……
「で、終いには息まで荒げて……もしかして頭打ったか？」

「……ありゃ夢か」

何なんだよ……あれ。

今思うと、小夜はただの幼なじみ、友達で……

あんな夢見る俺って、なんか最低だ……

自己嫌悪。

「どうする春吉、保健室行くか？」

俺を心配する赤佐。

しかし、俺は……

「保健室っ！？　い、嫌だ、絶対行かないっ！！」

何か、トラウマが出来ました。

ｐａｒａｌｌｅｌ　ｓｔｏｒｙ　－０４（前書き）

今回は第４話。

美羽は３人のヒロインの中でも微妙な立場ですよね。

楓や小夜ほどキャラ濃くないし。

まぁ、何が言いたいのかと言うと、非常に動かしにくいキャラだって事です。

parallel story _04

とある放課後、葉城高校図書室。

「問題、ドイツの首都はどこ？」

「ど、ドイツ？　えーっと……」

俺は必死に考える。

だって、考えないと……

「……あと5秒」

「あっ、ちょ、待って美羽っ！！」

そう、時間内に必死に考えて、答えを出さないと……

「……3秒」

「だーっ、待ってってば！」

「2秒」

「えっとドイツドイツ……ドイツと言えば……えーっと」

「1秒」

「……ドイツと言えば」

「はい０」

「……シュヴァルツェア・レーゲン？」

「……残念っ！」

そう言うと、美羽は手に持つ竹刀を掲げて……

「はい罰ゲーム！」

彼女は笑顔だ。

「待ってごめんなさいっ！　止めて、ベルリンの赤い雨だけは止めてッ！！」

「せいやっ！」

ぎゃあああぁぁぁぁぁぁっ！！

明日はテストだ。

俺こと木山春吉はすこぶる勉強が出来ない。

だからさっきまで権三朗と図書室で勉強していたのだが。

「悪い、俺さ、今突然魔術師（ヴァンパイア）と昔した契約を思い出してさ、ちょっくら公園行ってくる」

とか言う15分間に7回殺されないと死なない某主人公みたいな事言って、颯爽と図書室から逃げやがった。

ちょっとムカつく。

何等かの理由で8回死んでしまえ、このエセ某主人公。

で、

「あ、もしかして春？」

権三朗と入れ違いで図書室にきた美羽が、

「あ、じゃあ私が勉強見てあげようか？」

などと言うありがた迷惑をぶちかましやがり、

「え、いいですよ別に！　いや本当にいいです、いやマジで遠慮します！　ってかいらない」

と言う俺のささやかな抵抗虚しく、

「大丈夫よ、だって私生徒会長なんだし、勉強はそこそこ出来るわ

！」

と、ニッコリ笑うダーク生徒会長の右手には勉強と無関係の竹刀が握られており、

「あ、部長！　あの、倉庫確認したら竹刀が1本無くなってまして……」

「マジで？　誰か持ってったのか？　ってか倉庫には鍵を閉めていたのに……」

などと廊下から剣道部の連中の竹刀盗難騒動の一部始終が聞こえ、

「……私、生徒会長だから」

と、職権乱用的発言が目の前のダークさんの口から聞こえた。

そして……

「次、中国の首都はどこだ？」

「中国……中国……」

「残り5秒」

「中国……広東じゃなくて……」

「4秒」

「四川でもなくて……上海でもない……」

「3秒」

「チベット……は違うし、大連でもない……」

「2秒」

「天津、香港、広州、西安……吉林、唐山、青島、南京……あぁ、どれも違うっ！」

「何でそれだけ知ってて首都が出てこないのよ……あと残り1秒」

「えーっと……あ、分かった！」

「はい残り0！」

「甲龍ッ！」

「はい罰ゲーム」

うわ目がマジだ。

「ちょっ……ゴメン、2度もオチがインフィニット的なモノでゴメンっ！　……うおっ竹刀は止めてっ！」

「歯、食い縛ってね！」

「やだぁッ！　あの北京オリンピックん時の北京郊外に住む人が起こした暴動並みに止めてッ！！」

「……春、絶対わざとだよね！」

「は？」

「せいやっ！」

ぎゃあああぁぁぁぁぁっ！！

「痛い……身体も痛いが、特に精神が痛い……」

「何言ってんの春？」

地獄のテスト勉強後。

時刻は午後６時。
俺は半ば生きた屍状態で学校を後にする。
隣には美羽（笑顔）。

「……ねぇ春」
もう月が空に昇っています。
そんな薄暗い夕闇の中、下校していた俺と美羽。
「んあ？」
「あのさ……この後、暇だったりする？」
「……何で？」
「ちょっと……ね」
美羽のちょっとはだいたいちょっとどころでは済まない事ばかりだ。
「……具体的に言え」
「えーっ……うぅ」
「何だよ、何で言えない、何でためらう」
逆にそのためらいが怖いんだよっ！

「……じゃあさ」

そして地味に恐怖にうちひしがれている俺を尻目に、美羽の口が開く。

「……今日、勉強教えてあげたって事だから、その代わりに」

「……あれ勉強違う、拷問言います」

「買い物付き合って！」

「……はぁい？」

「あ～っ！　この服可愛いっ！」

「……」

「あ、こっちのもいいなぁ～！」

「……」

「でもこっちも捨てがたいし……」

「……」

女のショッピングってのは、時間が掛かる。

現在某ショッピングモール内の衣類販売店。

結局あのあと、半ば強引に美羽に連れてこられて、荷物持ち状態。

「うーん……迷う……」

美羽さんは夏用の服を求めているらしく、涼しげな爽やか系の服ばっかりチョイス。

「……ねぇ春」

「何？　まさか俺にどっちがいいか決めさせるとか？」

だったら適当に右って言いますよ。

「違うよ。ちょっとこのワンピース、試着してみてくれない？」

「……はぁ？」

美羽の手には、1着の涼しげなワンピース。

「着てる状態での後ろとかも見たいから、春！　お願い！」

「え～っ、やだよ。俺松雪さんじゃねぇし……」

こんなん着て山ん中全力疾走しろってか？
アレか、あの日見た松雪さんの勇姿を僕達はずっと忘れない……か？

「ねぇお願いっ！」

「めんま……じゃなくて美羽のお願いかっ！」

「だめ？」

「だめ。俺のプライド的に」

「……ちぇっ」

そう言うと、渋々ワンピース片手に試着室へ向かう美羽……ってか

「自分で着る選択肢あんのに、何故俺に着せようとしたっ！？」

「……」

「黙るなっ！」

すげぇ明後日の方を向きながら、美羽はすぐさま試着室へ。

「……ったく、俺を女装させて何がしたい！」

何だ、第三の性別的アレか？
某秀吉的アレか？

それから数十秒後、試着室のカーテンが開いた。

「ど、どう？」

「……あ、ああ」

そこにいたのは、いつもの3倍は輝いている濱垣美羽の姿があった。

ってか着てるの、さっきのワンピースじゃねぇし。

けど、白を基調とした爽やかなブラウスに、それを引き立てるかの如く、ミントギンガムのプリーツスカート。

これがまた美羽の雰囲気そのままで、正直めちゃくちゃ可愛いかったが、それは言葉に出さないでおく。

「ま、まぁいいんじゃね？」

「そう？　……じゃあ買っちゃおうかな？」

試着室後ろの鏡に映る自分を見て、購入の決意を固めた美羽。

「買っちゃえ買っちゃえ。買って買って買いまくって景気を復活さ

せろっ！」

「じゃあ買う！」

相変わらず笑顔の美羽。

……やっぱり、いいな。

そして約1時間の買い物の後、ショッピングモール1階のドーナツショップで軽い食事。

美羽の手には、買い物袋が2つ。

「このダブルチョコドーナツ美味しいっ！」

「お前、本当にチョコ好きだな……」

美羽のトレイにはチョコ系のドーナツが3つ。

見た目黒々。

ちなみに俺は苺、チョコ、プレーンとバランス重視。

「しかし……ドーナツ食べると夢とキボーが沸いてくるよな」
「ん？」
「何でもない」
俺は美羽の？顔を無視し、苺ドーナツをがぶり。
甘い、あまーい。
「やっぱりチョコ最高っ」
美羽もチョコドーナツを一口食べ、満面の笑み。
「すげぇにやけ顔」
「う、うるさいっ！」
俺の言葉にちょっと赤くなる美羽。
やっぱりからかいがいがあるなぁ。
美羽はちょっと慌てながらオレンジジュースを一口。
……しかし。
「なんかさぁ、俺らデートしてるみたいだよなぁ」
「ぶほぉっ！」

何気なく言った俺の言葉に、何故かめちゃくちゃ反応した美羽。
しかもオレンジジュースを吹き出す始末……って

「うおっ、ちょ、何かけてんだっ！」

美羽の正面に座っていた俺のワイシャツに、美羽の吹いたオレンジジュースがびっしゃり。

「げほっげほっ……ちょ、ちょっと春っ！　あ、アンタ何言ってんのよっげほっげほっ！」

顔真っ赤にしながらむせてる美羽。

「何って……ってかまずジュース拭け！　……ほら紙！」

俺はドーナツについてきた紙のナプキンを1枚美羽に手渡し、残りで自分のワイシャツのジュースを拭き取る。

「も、もうっ！　春は無神経過ぎるのよっ！」

「は？　何が？」

「う、ううるさいっ！！」

顔真っ赤で半ば暴れ出す美羽。
お前は怪獣かっ！

しかし……

「……うわ、やっぱり携帯濡れちゃったか」

テーブルの上に置いてあったマイ携帯。

それは、オレンジの香り漂うただの機械の塊へと化していた。

……はぁ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5180n/

Spring Storm

2011年10月9日20時15分発行